

目的 着衣時のスカートは腰部の広い面積で布を保持し、下方に布の自重により垂下するので腰部形状、布の量および布の材料的性質により種々の形状を呈する。筆者らはその形状を量的に把握することにより、種々のスカートの特徴を見出すことを目的として、先にスカートの形状評価について統計的方法を提案してきたが、その応用例としてタイトおよびギャザー率を種々変化したスカートについて実験を行った。

方法 人台に着衣させたブロードおよびパレス布地を用いたタイトスカートおよびギャザー率を変化したギャザースカート3種を用いて、6箇所部位の断面曲線を赤外線人体描画機により部位毎に繰り返して3回計測する。各断面曲線の中心から曲線迄の距離を計量して、時系列的解析を行う。すなわち生データから移動平均曲線（大むら）および残差系列曲線（小むら）を求めて、それぞれ系列の平均値および標準偏差を求める。

結果 ①一般にタイトスカートの断面曲線の形状の各部位による差は少いが、ギャザースカートは裾へいくに従い形状が著しく変化し円形を呈する。②断面曲線の \bar{x} は裾に近い程増大し、ギャザースカートはギャザー率を増す程その傾向が大である。しかし生データの場合は σ が大きく、曲線の形状の特徴を見出すのは煩雑である。③移動平均を施して得た大むら、小むらを解析すると、タイトスカートではスムーズ化した曲線の σ が部位により異なり裾へ行く程大となるが、ギャザースカートではその傾向はみられない。しかし小むら曲線の σ はかえってタイトスカートが小さく、かつ部位間の相違も少いが、ギャザースカートは倍率が大きくなる程、かつ裾へ行く程 σ を大にすることがわかった。